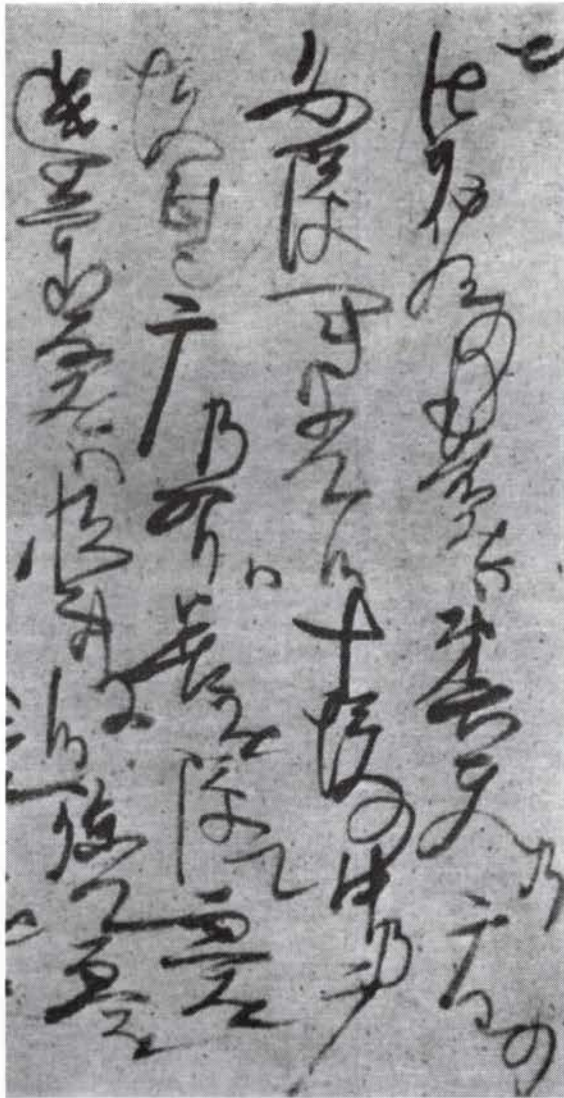




今月の御聖訓



法華經の行者をば第六天の魔王の
 必す障^さすべきにて候。十境の中の魔
 境此^レ也。魔の習は善を障へて悪を
 造らしむるをば悦ぶ事に候。【強いて悪を】
 【富木入道殿御返事 全集九八一頁】

目次

今月の御聖訓	
卷頭言	菅野憲道 1
【講話】「第六天の魔王（他化自在天）とは」	菅野憲道 2
《宗祖日蓮大聖人御大会式を奉修》	8
【御大会式講演】「正しい信心を土台に、心を清浄に」	高森仲道 9
【カメラ・アイ】《御大会式》	10
読書案内『『感じる漢字』	松田銘道 17
【所感】「宗祖の精神）」	森 秀之 18
【講話】	20
十二月の行事 師走詠草 恵日俳壇 訃報	

説明責任

菅野 憲道

旧統一教会と自民党の議員との深い関係が露見して、どこまでそれが広がっているのか、説明がなされるほど不信感も広がっている。またすぐに関係を絶ち切ると公表する議員も続出しているからあまり褒められた関係では無いのだろう。しかしそれでも、いったいどのような思惑と目的で、どのような関係にあったのか、ますます分からなくなる。細田衆院議長などは貝のように口を閉ざしたままだから疑念はますますばかりである。

もともと旧統一教会と自民党の関係のキーマンが安倍首相であることはほぼ間違いないが、関係者がこの疑惑の中心を調べようとしてもしないのでは、当初からこの問題の全体像を明らかにするつもりが無いことを示し、財務省理財局の記録改竄事件と並んで、この国の闇の深さの一端を示している。

去る日、旧統一教会問題と創価学会問題とどう違うのかと尋ねられて答えに窮したことがあった。創価学会の問題は宗教・政治・マスコミ・教育・経済界・芸能界など、あまりに多岐にわたっているし、特別財務のような金銭問題も旧統一教会の比ではない。自公連立の票割も超保守の安倍氏が中心となっていたと思われる。これらの問題がこの先どう展開していくのか、誰も予測出来ない状況となり、創価学会の大幹部も、これまで様々な謀略を行い、裏取り引きを重ねてきた分、いつかは自分たちに引火するのではと不安にかられていることは想像に難くない。透明・公開・説明責任は民主主義国家の健全性をあらわす指標でもあるが、ここまで闇が深いと亡国の影もちら付いて来る。

もともと日本人の菩提心に影響を及ぼすべきはずの日蓮正宗宗門のていたらく、阿部師の相承詐称、法主盗座以来すつかり迷走して、法主就任についての、証拠提示どころか説明責任も果たさず、説明を求めて質問した多数の僧侶を擯斥処分にしたのちは裁判闘争、諸堂の解体再建、学会破門、無理な折伏ノルマを押し付けて自殺者を出したかと思えば、成果不振の住職を集めて総括したり、成果数を粉飾したりなどすつかり変調をきたしてしまったのは因果応報と言うべきか。



お講話 (要旨)

拝読御書 「最蓮房御返事」 (全集一三四〇頁)

第六天の魔王 (他化自在天) とは

菅野 憲道

《三界について》

本日は「最蓮房御返事」を通して、第六天の魔王について、少々お話しします。

我々の住む境域の認識、すなわち世界観や生命観について、現代人の多くは物質的に、かつ生物学的にとらえているのが一般的です。眼耳鼻舌身の五根の対境として認識される客観的な世界こそ、絶対的な存在と信じている人が大半です。

しかし我われの「境界」や「いのち」といえば、そればかりではありません。欲望や感情、観念や業報といわれるもの等を含めて、生命現象には、その人の「いのち」と表現されるような、心理的、精神的、意志的世界が不可分に結びついており、認識の主体である我々自身の認識の変化が、境界をも変えてしまいます。ですから、有無の二元論に立つ物質的な見方だけでは、この世界を把握するのは無理なのです。

仏教では生きたこの世界を、三界 (欲界・色界・無色界) として三つの基準からとらえております。

一番上に無色界 (一切の肉体や物質から離れた境界、精神だけの境界) があり、ついで色界 (欲界の汚濁を離れた精妙な物質の境界) は十八天までである。その下の欲界とは色欲・食欲の強い有情の住む境界で、一番上には六欲天 (他化自在天) があり、次いで、人界の四大州、その下に四悪趣の修羅・畜生・餓鬼・地獄が広がっているという。

これを言い換えれば、一念の「いのち」は時々刻々変わるのですが、その「いのち」には質の悪いもの、良いもの、種々様々です。とくに怒りの感情や自暴自棄の心理は容易に破滅的、破壊的な「いのち」となりますし、他人の不幸を喜ぶような心理も冥伏しているのです。

あるお経には「一人一日中に八億四千の念々が起こり、これらはみな三途の業因となる」と説かれておりますが、自身の心を観察すると、たしかに心の中から次々と妄想・空想・思念の類いが湧きおこっていることがわかります。また、たとえば万引きのような悪事をしてかした人が、それが露見して動機を問われた時、「魔がさした」という表現を使います。その「魔」

とは他所から来たものではなく、心の底に眠っていた「魔」が急に動きだしたという意味なのでしょう。すなわち数え切れないほどの種々の想念が瞬時に地獄から天界までの六道を流転しており、その念が諸縁にふれてさらなる地獄、餓鬼、畜生の想念や魔の想念となり、心を占領され支配されることになります。

その悪い妄想や魔は、平穏な状態では、身体の免疫システムと同じように、恥とか慈悲の自制がはたらいて淘汰され、目の見ることはないのですが、我慢偏執の心が強くなってくると、道理は分からなくなり善悪の判断もつかなくなって、好き嫌いとか苦楽、損得・自尊心等の偏った盲目的な判断を繰り返して、人界から修羅・畜生・餓鬼・地獄へと浮き沈みすることになるのです。

しかもたいいていの人は、自分が餓鬼や地獄の世界に堕ちていてもそれと気がつかず、

「地獄に処すること圍觀に遊ぶが如く」(譬喩品 全集一〇八〇頁)

とあるように、あれすさんだ生活も、慣れてしまえば園地で遊んでいるような気分が無自覚となるものです。これは、例えば、累犯者の多い刑務所などでは、受刑者の中に自ずから序列ができるそうです。その基準は如何に大きな犯罪を犯したかによって、受刑者から畏敬の念を持って見られ、一目置かれることにもなるようです。このような倒錯した論理は社会の至るところで見受けられることで、若い時に理由もなく暴力をふるったり、悪事を働いた事が、自慢話のように語られたりするのもよくある話です。

《第六天の魔王のいるところ》

このように、欲界の六道にもいろいろな境域がありますが、欲界の一番上のところには第六天の魔王が住むといわれます。これはまたの名を天子魔ともいい、三障四魔のうちの一つに挙げられます。この天子魔の住むところを他化自在天というのです。他化自在天とは、他を化すること自在といえますから、人々を支配して、その業を奪い、自分の思い通りに動かすことができるということです。

この第六天の魔王に特徴的な本性を調べて見ますと、面白いことが分かります。それはまず第一に、

(1) 「我滅後、正像末の持戒・破戒・無戒の弟子等を、第六天の魔王・悪鬼神、人王・人民・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の身に入りかはりて悩乱せん」(行者仏天守護抄)……とあるように、法華經の行者が現れると、第六天の魔王も王権者などの身に入り替わって様々な妨害を企て、迫害を加えること。次下の文では、国王、国主、天子魔の名も上げているように、第六天の魔王は権力者をそそのかして迫害するばかりでなく、自ら権力者となって弾圧を加えることが説かれております。

○「又第六天の魔王……或は国王の身に入りて法華經の行者ををどし、」(兄弟抄)

○「其の中に天子魔とて第六天の魔王、或は国主、或は父母、或は妻子、或は檀那、或は悪人等について、或は随ひて法華經の行をさ(障)え、或は違してさ(障)うべき事なり。」(種々御振舞御書)

(2) 「第六天の魔王は三十二相を具足して仏身を現す」（題目弥陀名号勝劣事）……と記されるように、第六天の魔王は仏の名をかたり、外見は仏の尊げな姿に似せてふるまう。

(3) 「阿難尊者、猶、魔と仏とを弁へず。善導・法然が通力いみじしというとも、天魔・外道には勝れず。其の上仏の最後の禁めに、通を本とすべからずと見えたり。」（題目弥陀名号勝劣事）……阿難尊者すら魔と仏を見分けることができなかつたことがあるように、さも「○○先生はすべてをお見通し」とか「会うだけで福運がつく」などと凡夫にはない不思議な神通力をもっているかのようにふるまう。また普通の人とは違って通力があるかのように演技して思い込ませる」

(4) 「第六天の魔王が此の国の衆生を他の浄土へ出ださじと、たばかりを成して、かく事にふれてひがめる事をなすなり」（四思抄）……欲界の主でもある第六天の魔王は衆生が法華経を信じて支配下の欲界から脱してしまふことを恐れており、そのために衆生を困いこんで放さず、それでも脱ける者や批判する者には謀略を用いて迫害し、様々ないやがらせをする。

(5) 「第六天の魔王が此のものどもが身に入りかはりて、仏法をやぶり外道の法となさんとするなり。」（報恩抄）……第六天の魔王が高僧・貴人や国王の身に入り替わり、仏法を説く真似をしてその実は仏法を世俗の次元に引き下げ、外道の法を説く。仏法を奉ずるはずが復讐や勝他、怨念などの外道の指導をくり返す。摧尊入卑をさす。

(6) 「第六天の魔王は欲界の頂に居して三界を領す。」（法蓮抄）……第六天の魔王の領有する境域は欲界のみならず色界、

無色界にまでおよぶといい、魔の出没する領域が多方面にわたる事を示す。

(7) 「提婆達多・阿闍世王の悪事は、ひとへに第六天の魔王のたばかりとこそみて候へ。」（三沢抄）……釈尊に敵対して危害をくわえた提婆達多等の悪事の張本人は第六天の魔王であるが、用心深い第六天は自らは無関係を装う。

(8) 「元品の法性は梵天・帝釈等と顕はれ、元品の無明は第六天の魔王と顕はれたり。」（治病大小権実違目）……第六天の魔王とは、元品の無明、すなわち根源的な煩惱ともいえる我慢偏執のいのち、エゴの「我」が顕在化したものであり、法華経を受持すればこの「我」が消滅することに反発して最後の障壁となり、誰にでも魔が競う事がある。

以上、簡略ながら第六天の魔王の特性を御書から調べて見ました。そうするとその特色に当てはまりそうな人物が二人ほど思いあたります。皆さんが想像する人物、次元の低い争いと、恥知らずなふるまいで日蓮大聖人の仏法に泥をぬってきた者こそ、その二人でしょう。独裁者として組織を支配し、教団における権限を集中して一手に握りながら、責任は一切とらないという稀有の権力者の身には第六天の魔王が入り替わっていたとしか考えられません。でなければ彼等ほどの悪業の数々は法華経を信ずる信仰者として考えられません。

《権力の魔性―権力は腐敗する》

ところで、織田信長が第六天の魔王を自認していたことは良く知られております。武田信玄（天台座主・権僧正）への書状

にも第六天の魔王と署名しているといわれておりますから、よほどの思い入れがあつてのことだと思ひます。

日本がバラバラに分裂していた戦国時代は下剋上や人間不信の時代であり、寺社や朝廷の権威は地に堕ちており、戦国大名は各自で法律を作り、自前の武力で自力救済を計る他ない世の中でした。天下統一をめざして、諸勢力にいうことを聞かせることは、強大な武力によつて勝ち抜いた権力にしかできないことだったのです。

武力による統一と支配は、織田軍の圧倒的な力を見せつけて恐怖心をあたえなければ屈服させることはできません。これが叡山焼き討ちのような残酷非道な戦さを仕掛けて多くの無用な血を流させた理由で、信長は鬼畜の如く恐れられて恨みをかうことにもなつたのでした。したがつて日本の統一を成し遂げた英雄という栄光の反面、冷酷な独裁者としての暗い影を甘受しなければならぬワケです。

《権力の魔性―権力は腐敗する》

世の権力者には立派な人物もいるのでしようが、多くの場合年月を重ねるにつけ権限の集中と強化を計り、言論を統制し、政権の私物化が始まります。「権力は腐敗する」という格言があります。権力は利権の原産地でもありますから利権を求め様々な人間がすりよつてきて、情実がかさなれば不正な政治が行われます。そこからは権力者に反対する国民への抑圧が始まり、政権が長期に亘ると関係者には自然に特権意識が生じ、特別の待遇を求めるようになる。一方、批判的な国民を軽賤す

るような独裁者もおり、スターリンや毛沢東などはその死後に厳しく批判され、文化大革命なども毛沢東の権力闘争から始まつた最悪の失敗とされているようです。

現在においてもロシアのプーチン、中国の習近平、北朝鮮の金正恩等、国民を奴隷のように支配して圧政を敷いているのです。これらの権力者は内部の権力闘争などを勝ち上がつてきた者でもあり、政敵を失脚させてその地位を奪つてきた者が大半です。権力者の地位にいたら、自分の支配する世界からは、批判者を追放したり処刑して肅清が行われます。

第六天の魔王は他の業を自在に我が物とできるといふ他化自在天に住み、人々の能力や財産やあらゆるものを自在に受用出来る最高権力の座にあるわけです。

権力への強烈な欲求も、いわば貪欲のもたらすところで、それは、煩惱の中でも一番最奥の「元品の無明」といふ、人間のエゴの根源から起こつてくるものです。我われにそんな強烈な権力欲はなくても、多かれ少なかれそういう我慢偏執のいは潜在的にあるものです。

そこで考えなくてはならない事はなぜそういう指導者が出てきたのかということ。例えばヒトラーのような独裁者が、なぜドイツ国民から圧倒的な支持をうけたのかという点です。勿論演出や宣伝が上手かつたことはいふまでもありません。それよりも第一次大戦後のドイツ社会に、閉塞的な状況が続き、フラストレーションを抱えた市民の中に強い英雄待望論が生まれてきた事の方が大きいでしょう。救世主待望論といった方が良いのかも知れませんが、とにかく現状を変えてくれる強力な指導者を

望んだのです。それはすべての人々の願望でもありますが、自分の願望をスーパースターに投影し、同化して、その活躍を自分の活躍ととらえるような心理があります。ヒトラーは大衆心理を讀んで、その上にファシズムの運動を進めていったのです。

人には英雄になりたい、あるいは人々の上に立ちたい、支配する側に立ちたいという願望があり、日本でも織田信長や豊臣秀吉は、今でも人気があります。仏法に照らせば第六天の魔王そのもので、老若男女、何万、何十万の人の命を奪った独裁者なのです。大河ドラマで見るとうなものではないのです。

もし彼らが、仮に法華經の信仰に入っていたなら、法華經の信仰には不輕菩薩のように、一切の人々の仏性を敬う人間尊重の信仰がありますし、エリート志向、権力志向とは真逆の名字初心という謙虚な心、本来誰もが平等に仏の子として仏性をひめているという人間観ですから、人々の命を軽視して無為に虐殺したりすることはできないのです。

おそらく信長は第六天の魔王から選ばれた特別な人間で下々の者とは生まれる以前から違うというような差別意識を持っていたから、平気で人を殺したり弄ぶことが出来たのです。

そういう命が、我われの心の中にも、いわゆる欲界の一番最高位のところに、権力欲、上昇志向、あるいは自分が全ての人

々から敬われたい、認められたいという命になって行くところに、第六天の魔王、他化自在天ということがあるのです。

《順縁と逆縁、有縁と無縁》

考えてみると、権力は衆生によって支えられているものです。ちょうど海の上に浮いている船のようなもので、静かな海であれば快適にやすやすと航海できますが、いったん嵐に遭遇して大波や暴風を受けると、船も大破したり、沈没することもめずらしくありません。権力というものも一般大衆の支持があつてこそ維持されて力を發揮出来るのですが、それが忘れられて、父母なる海でもある民衆を自分の手足か所有物のように思い、使役し、搾取することばかり考えるところに、悲劇が生まれてくるのです。

その意味で、権力は本来衆生から委任されているのです。これは仏様と衆生の関係でも同じで、「心仏及衆生、是三無差別」という經文があるように、法界全体に遍満する妙法の次元に立てば、衆生も仏も心も無差別にして一体であると教えられていながら、凡夫は船と海とが一体



織田信長と豊臣秀吉(左)

体となって航海していることを忘れてしまうのです。世間法ではすぐ差別とか対立という二分法になりますから、船のことだけしか見えていない権力者にとって自分と見方の違う者は妨害者にしか見え、批判すると疎外したり、追放するようなことになります。

しかし大綱・網目などのさまざまな視点からの批判によって論理的な正確さが検証され、その内容の真偽が判断できるので。

また仏教では信を強調します。それも「無疑曰信」（疑い無きを信という）また「疑いは解の津」ともいつて疑いは正しい信解の入り口だと説かれているのです。決して疑問を持つことを否定するものではないのです。疑問を放置しておくことが問題であつて、疑いが起こればそのつど法華経と御書に解答を求めるか、善知識に尋ねればいいのです。また、仏教では常に論議が大切にされてきました。これも教えの意味を正しく解釈すべく疑問を設け、公開の場で論議が闘わされてきた伝統があります。宗祖も御書には檀越などからの様々な疑問も取り上げて問答体にしてその答えと共に書き記されております。

今の時代、学会的な信仰とか宗門的な信仰観でも、なんでもまず「疑うな」と教えて「師匠が白いものを黒と云つたら黒だ」などと嘯いている僧侶もおりますが、それは大変な間違いです。特に組織に対する疑問や批判を異常なまでに拒否して封じ込めようとしますが、これではいかにして正邪、真偽を見分けることができるか、まったく無責任なことになっているのです。ましてや「宗務院批判はゆるされぬ」とか、「学会批判は謗法だ」などというのは、よほど批判に弱い、いい加減な組織であることを物語っているでしょう。昔から「宗教批判の原理」などによって他宗他門ば厳しく批判しながら、自らへの批判は拒否して無視するのは身勝手に過ぎるし、批判するのに許すも許されないもない。むしろ議論を活発化させることで、信仰を深めていくことが急務なのです。いろいろな角度から検

証し、そこで問題があれば軌道修正していくことが担保されてこそ、初めて正しい教団だということがいえるのです。

政治権力の世界においても、権力への批判があつてこそ、初めて権力の濫用をチェックできるのです。しかし独裁者は批判するものを疎ましく思い、周りにはイエスマンばかりを集めて耳さわりの良いお追従ばかりを聞いてものごとを進めようとするのです。そこに大政翼賛の落とし穴があるのだと思います。権力者は、反対する人が出てくると、力で封じ込めて抑圧しようとするが、道徳で説得して理解してもらえば一定のコンセンサスが生まれ、それによって全体がまとまって、物事の解決に向かつていくことになると思うのです。その手順を大切に、丁寧な道徳をもって根気強く示していかなければならないのです。

かたくなで道徳をもつて説得することができなければどうするかといえば、法華経ではそれを逆縁と順縁、有縁と無縁といつて、必ず有縁の人と無縁の人が出てきて、正しい教えに対して、縁のある人ならいいけど、無縁の人はその範疇に入らないのです。世間では、逆縁は敵対する者、対立する者で、排除され、無視され、消されてしまうのですが、仏教はそうではなく、賛成する人と反対する人も共生しているのがこの世界で、逆縁の人もみな仏子、仏様の子供で仏性を持っているから、仏様になる可能性を持つているとして不軽菩薩の例をもって説かれ、大分逆縁の捉え方が違うのです。

今日は時間ですので、このことはまたの機会にお話したいと思ひます。ご清聴ありがとうございます。（お題目三唱）



日蓮大聖人の常住不滅をお祝いする

宗祖日蓮大聖人御大会式を奉修

源立寺恒例の宗祖日蓮大聖人御大会式が、十一月五日（土）の御逮夜法要、翌六日（日）の御正当会の両日、法華講・檀信徒が集って厳肅裡に奉修されました。今年のお会式は、例年の第二週の土・日から第一週の土・日に変更しての奉修となりました。また、コロナ禍の中での奉修となったため、お逮夜・正当会とも、マスク着用、受付での検温、手指の消毒等、感染防止に皆様のご協力をいただきました。そんな中、五日の御逮夜は、午後六時、出仕鈴が打たれる中ご住職が出仕され着座、法要が始まりました。寿量品に入り「而説偈言」で磬が打たれると、有師（藤村道監師）、立正安国論（住職）、大聖人（森秀之講頭）、興師（井元恵子さん）、目師（松井照雄さん）、道師（佐藤千賀子さん）、行師（中澤千代さん）の順で、申状が朗々と捧読されました。読経終了後、菅野ご住職の挨拶に続いて、有田川町法華寺内・藤村道監師より、ご講演をいただきました。

翌六日の御正当会も、朝から雨の心配のない一日となり、早朝から準備のために婦人部、地区役員、幹事の協力により、テントの設営、ご供物の準備などが行われ、あわせて受付、台所など裏方の用意も終え、教区ご僧侶の到着と法要を待ちました。

御正当会は、午後二時、出仕鈴によりご住職、教区ご僧侶が出仕・着座されて始まり、始めにご住職が献膳され、読経・焼香・申状捧読と如法に進められ、終了後、阿倍野区・聖道寺内・高森仲道師により、「正しい信心を土台に、心を清浄に」（九頁から掲載）と題してご講演をいただきました。

講演の後、お花くずしが行われ、御大会式は滞りなくすべて終了しました。

正しい信心を土台に、心を清浄に

聖道寺内 高 森 仲 道

本日は快晴の秋空の下、源立寺の宗祖日蓮大聖人御会式が厳肅に奉修されました、誠にめでとうございます。皆様にとりまして、今日のお会式を無事に迎えられ、大きな豊かな実りの秋になったこととお祝い申し上げます。

また源立寺様の御会式を以って、南近畿教区の各寺院の御会式が滞りなく終わったこととなります。幸いにどのお寺も快晴の青空のもとで奉修することができまして、誠に有り難いことと思う次第であります。

私は阿倍野区の聖道寺で奉公させていただいております、高森仲道と申します。

これから少し時間を頂いて、御本尊様に向かつてお経とお題目を唱えるという毎日の仏道修行によつて、我々の心にある様々な煩惱や汚れを清めているという話をこれからしたいと思います。よろしくお願い致します。

《信心の基本》

さて、私が在勤している聖道寺の法華講婦人部の企画で、以前、日頃分からないうことを質問して、住職や私がそれに答えるという化儀の質問会を、多くの講員さん達が参加して行った時がありました。参加された講員の皆さんは入信してか

らすでに数十年過ぎていますけれども、信仰の基本的な作法や心得というのは分かっているようで分かっていなかったと、また知らないことがあったので、よく分かった等の様々な感想が後から寄せられました。

その感想を編集してお寺の寺報に掲載して、参加された講員さんも、また参加出来なかつた講員さんも寺報を読んで改めて化儀のことをよく理解されたことがありました。

そういう基本的な仏道修行の化儀作法というものは、我われの信仰が年々深まれば自然と姿・形に表れてくるものと申



守国論奉読



教区ご僧侶による申状の奉読

アイ》
御大会式》



(正当会)



師によるご講演(御遠夜)



法華講代表者による申状奉読(御遠夜)



教区ご僧侶による申状の奉読



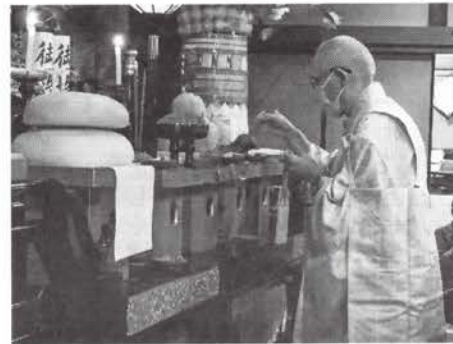
御住職の工



《カメラ》
《令和四年》



高森仲道師によるご講演



藤村

(9頁下段よりつづく)

しますが、例えば毎日の朝晩の勤行というのは、大聖人様の教えを信仰する我われ僧侶にとりまして、御信徒の皆様にとりましても、基本中の基本というべき仏道修行、作法のひとつであります。信仰の目的である御報恩とか回向とかというものは、お経を唱える、またお題目を唱えるという朝晩の勤行の中に全てが含まれているわけでありませう。

というのは、我われがお経を唱える、お題目を唱えることによって、信仰の目的を通して心に穏やかな境地を開き、そして豊かな清らかな心をはぐくんできて更により良き充実した生き方を、人生を送ることができるといのが、大聖人様の教えであると思ひます。

ご存知のように、南無妙法蓮華経の南

無とは妙法蓮華経に帰命すること、即ち妙法蓮華経に我われの命をささげるとい



講演される高森仲道師

う意味であります。ですから、そのお題目を唱えるということは、自分の心を妙法蓮華経にまかせること、即ち南無妙法

蓮華経の心を、自分の心として振る舞うということでもあります。

しかしながら、ただ早く唱えて多くの回数だけを求めたり、また功德だけを求めたりするようなお題目を唱えていますと、自分の心を南無妙法蓮華経にまかせるといふことではなく、それは逆に南無妙法蓮華経を自分の心にまかせていることになってしまい、本末転倒のお題目になってしまふわけでありませう。

ですから、大聖人様の教えを正しく信仰する我われは、そういうお題目を唱えるのではなく、妙法蓮華経は大聖人様の心、お振る舞いであるといふこと、即ち我われは心から唱える、豊かな清らかな心でお題目を唱えることが大切なわけでありませう。

そのように、我われは大聖人様の心を通して、大聖人様の仰せられた信仰を受け持っているわけでありませう。

ところが、毎日、日常生活をしていきますと、心に煩惱という様々なゴミやホコリというものが入ってくると思ひ

ます。そういう煩惱を心に抱えていますと、日常の生活においても信仰においても心と身体においても、やがては大きな妨げになるわけでありませう。

《須梨槃特の話》

仏の弟子で、須梨槃特という方のお話があります。

昔、釈尊にはたくさんの弟子がいらっしやいました。その中の一人に須梨槃特という弟子がおられました。この方はものを覚えるのがたいへん苦手で、物忘れが最も激しい人であつて、自分の名前すら覚えられなかつたのであります。

釈尊は、そんな槃特を哀れに思い、次のような一偈を授与されました。

「守口 摂意身莫犯 如是 行者得度
世」

これは「うそを云わない、心をひとつにして、身にあやまりを起こさない、そ



修利槃特

れらを修行すれば、生死の苦しみからのがれることができる」という意味の十四文字の言葉であります。須梨槃特はこの十四文字をも、三年間かかつても覚えることができない弟子だつたわけでありませう。

そのため、釈尊は須梨槃特に一つのこ

とだけを教えたわけでありませう。それは何かと云いますと掃除をする時に使う一本のほうきを持つて掃くという、掃除をなさうということを教えたわけでありませう。

しかしながら、須梨槃特は頭が悪い方でありませうから、掃除をしようとしても手に持つほうきを忘れたり、逆にまたほ

うきを持つと今度は掃除をすることを忘れてしまうわけでありませう。それを見た兄弟子も、ならば「先にほうきを持つて掃く」という言葉を覚えなさい」と教えて、暗唱することから始めたわけでありませう。ところが、たつたそれだけのこともなかなか覚えられず、毎日「ほうきで掃くんだ。ほうきで掃くんだ」と何度も何度も繰り返していたわけでありませう。

そして六年目になつた時に釈尊の言われた一本のほうきの真実によく気が付いたわけでありませう。自分は毎日、一本のほうきを持つてゴミやホコリを掃いているけれども、本当は一体何を掃いているんだらうと考へまして、実はこれは自分の心にある汚れを掃いているということなんだと、やつと気がついたわけでありませう。

即ち、一本のほうきとは何かと言いますと、それは智慧のほうきのことです。その智慧のほうきというのは釈尊の説かれた教え、即ち八正道ということでありませう。

大聖人様が説かれた教えの究極は、南無妙法蓮華経を信の一字で受持することに尽きるわけでありますが、積尊は日常生活の中に、具体的に八つの正しい道ということを説かれたわけであります。

仏様の正しい教えによって自分自身の煩惱を心の汚れを掃き清めるということを説かれたわけであります。そのことに須梨繫特はよく気がついたわけであります。

そして、須梨繫特は積尊のそばに行つて、「教えて頂いた教えの意味がわかりました」と云いますと、そこで積尊は「よく気がつきました」と云われて、須梨繫特に対して弟子達の中で一番最初に成仏の記別を与えて、「お前が今、悟つた中身というのは仏の悟りと少しも変わるところがない」ということを云われて、非常に褒め讃えたという話であります。

この須梨繫特の話は、我われもやはり正しい信仰による仏道修行の掃き清めるほうきによって、自分自身の心の中の汚れを掃き清めることを、いつも心がけることを忘れてはならない、ということ

説かれているわけであります。

実際、我われは家の中で生活をしながら住んでいるわけですが、掃除という一つの作業にしても毎日掃除をしないでいると、畳の部屋とかフローリングの部屋もだんだんと汚れてくると思いますが、例えば、一週間でも掃除をしなかつたら、「塵も積もれば山となる」という言葉のように、ホコリとゴミの部屋になります。ところが、毎日三十分なり一時間なりと掃除をしていますと、いつもきれいな部屋になっているわけであります。

あるいは庭に生い茂っている雑草の草取りにおきましても、していない場所は草が伸び放題になって、作業は大変なことになると思います。その雑草は取つても後からまた生えてくる面倒な草でありますから、これも毎日少しずつ取つていると作業時間も短く片付くわけであります。

しかしながら、手を抜いてほっておくと伸び放題になって、土の中に深く入りこんで根絶するということはなかなかできない、

大変な作業になるわけであります。

それと同じように、我われの心にある煩惱も同じことと思えます。何事も自然のなりゆきにまかせておきますと、欲望とか、愚痴とか、感情とかというものが段々と大きく広がって、そして気がついた時は、どうすることもできないような状態になってしまうわけであります。ですから、そのようになる前に自分を正しく保つ、正しい信心による仏道修行というのを心がけることが自分の心を清める一番の方法になるわけであります。

《心の財を積むことが大切》

また、よく心の財ということを示しますが、その財は決して難しいことを云われているわけではないと思えます。自分が自分に対して、誇りを持てるような人生を送ることができたならば、それが本当の心の財であると思うわけであります。

鎌倉時代に、大聖人様のご信徒でありました四条金吾さんが、大聖人様からいただいた沢山のお手紙の中の一節に、

「蔵の財よりも身の財すぐれたり。身の財より心の財第一なり。此の御文を御覧あらんよりは心の財をつませ給うべし。」
 という御文がございます。

四条金吾さんは大聖人様のご信徒でありましたが、また鎌倉幕府に仕える武士でもありました。その金吾さんの性格というのは、正義感が強くて真っ直ぐ、しかし、気が短くて頑固で怒りっぽい等と激しい感情の方と云われています。そういう金吾さんの性格であれば、心をコントロールすることは、大変だったと思うわけがあります。何事も一途で、中途半端にできない。そして何にもやましい所がない。いつも堂々と胸を張って生きて、自分の命さえも、いざ主君のためならば、いつでも預けられる覚悟を持って忠義に励んでいる。そういう性格でありますから、主君からも厚い信頼を置かれていたわけがあります。

しかしながら、金吾さんがこの「心の財第一なり」というお手紙をいただいた

頃は、主君と金吾さんとの厚い信頼関係をねたむ同僚から、他宗の僧侶との問答の場において、金吾さんが乱暴を働いていたとか、事実を曲げて悪く云われたために、金吾さんは主君から厳しく非難さ



講演を聴聞する参詣者

れて、窮地に立たされてしまったわけがあります。当然、短気で感情的に激しい性格の持ち主であった金吾さんは、主君にも同僚たちにも腹をたててイライラし

ていたと思います。

そういう時に、金吾さんの性格をよく知っておられた大聖人様から、先ほどの「心の財第一なり」とのお手紙をいただいて、金吾さんは諭されたわけであります。

そのお手紙には、「四条金吾は、主君のためにも仏法のためにも、世間に対する心がけについても、非常に立派である」と、鎌倉中の人々からうたわれるようになりなさい。大切なことは、ムダに長生きをして汚名を残して死ぬよりは、たとえ一日でも妙法に照らされた悔いを残さぬ生き方をしなさい」と大聖人様は仰せられたのであります。

そして、「そのためには、お金を蓄えるという生き方よりも、健康な身体を持つ生き方を、そして更にもっと大切なことは、心の財を積んでいく生き方を、第一と心がけるようにしなさい」と、このように諭されたわけがあります。

即ち主君に対して恥ない、あるいは仏法に対して恥ない、また自分自身に対しても恥ない人生を送ることができたその

命こそ、本当の心の財である、と大聖人様は仰せられているわけでありませう。

そのような金吾さんの生き方に対して、我われが世の中をあざむき、あるいは人をあざむき、あるいは自分に恥るような生き方をしていたら、非常に後めたい、非常に悔いが多く残る人生になってしまうと思うわけでありませう。

毎日をどのような心がけて生きるかという所に、幸せとか不幸とかいうものが、自然と決まってくると思うわけでありまして、財産が多いとか少ないとか、あるいは頭が良いとか悪いとか、そういうことで幸せが決まるわけではありません。

我われは、生きていくために多くの方法を身につけて、お金も蓄えて身体も健康でいたい、と当然思っております。それは勿論大切なものであります。しかし、心がゴミやホコリという、欲望や煩惱でいっぱいになって汚れて曲がってしまったら、大切な財は何の役にたたないし、返って妨げになってしまいかも知れません。その煩惱が我われの周りを取り

囲み、それはまた些細なことで、右に左に揺れる時もあると思ひます。一つの欲望に満足したら、それに満足せず次の欲望が湧いてくるわけでありませう。そういう揺れる心をコントロールするというのは、なかなか難しいことでありませう。

例えば、自分の欲望を満たすために悪いことをした人がいたならば、その時は良い思いをして楽しく遊ぶことができたり、また美味しい物を食べて、欲しいと思つた物を買つた等と、その時は満足することができると思ひますが、その後からは、自分の心と戦つていかなければならないわけでありませう。

それに対して、我われは悪いことをしませんが、しかしよく考えますと、それに近いようなことを、時々してしまつたりしているかも知れませう。嘘をついたり、ごまかしたりしていると、そういうことが少しずつ自分の心に汚れという煩惱が、だんだんと積もってくるわけでありませう。そうすると、自分が自分に対して誇りが持てないとか、自分で自分を

るのがいやになるくらい汚れた人間、みにくい人間に見えてくるわけでありませう。

そのように、我われの心に種々な汚れ等が積もると、毎日を生きてても、少しも楽しくない等というような気持ちになってしまうわけでありませう。

けれども、それを揺るがない、しっかりとした清らかで、豊かな心にするためには、お経を唱えて、お題目を唱えて、心の煩惱を掃き清めて、清浄な心に変えていかなければならないわけでありませう。ですから、我われは自分に対して少しも偽る所がない、あるいは自分自身の良心に対して、少しも恥じることのない人生を送るといふ意味で、自分の心の煩惱はただ自然にまかせず、正しい信心を土台にした、毎日の仏道修行のほうきで以

つて掃き清めながら、いつもきれいに心掛けることが大切であると考へていただひて、本日のお話にさせていただきます。

本日はおめでとうございました。
南無妙法蓮華經。

(丁)

本書の「はじめ」で、著者は漢字に対する新たな発見について、

「ふだんはそのありがたみも忘れて便利に使っていた漢字ですが、TOKY OFMの番組「感じて、漢字の世界」を担当するようになってからは、漢字に対する見方が変わってきました。：三千年以上前の人々が、日々の暮らしの中で自然を見つめ、人の心を見つめ、それを絵のような形に表すところから創りだされてきました。……その頃の人々の暮らしぶりや、ものの考え方がそのまま反映されているわけです。そう考えて漢字を見ていくと、いかに三千年前の人々の洞察力や抽象表現能力が高かったかに驚きます。」と綴っている。

本書を開くと、三十五の漢字の成り立ちが丁寧に解説されている。漢字の一字が、自然から少し遠ざかって生きがちな私たちを、原風景へと引き戻してくれるのみならず、今を生きていることのあるがたさにも気付かせてくれる。

私たちが、今を生きていると実感するのはどんなときだろう。朝に目が覚める、

読書案内

松田 銘道



山根基世 著

『感じる漢字』

自由国民社
定価一六五〇円

その一瞬にあると誰もが感じているのではないだろうか。

朝は一日のはじまりでもあり、今を生きている証でもある。その朝を祖先はどのように感じて迎えたのか、「朝」の一字を紐解くことで伝わってくる。

「『朝』という漢字を書いてみてください。『十』という漢字は、横にふたつ並べると『草かんむり』になります。これは、草と草の間から日が登ってくる様子。東の草原、その地平線からあらわれたのが太陽です。そして右側には「月」を書きます。これは、振り返って西の空を見ると、薄く有明の月が残っている様子。「朝」という漢字は、太陽と月が一緒に見える。暁のときを描いているのです。」

どの風景から成り立ちを解説している。月がわずかな光を届けていた夜の世界から、あらゆる生命を育んでくれる太陽が無事にのぼってくる。その一瞬を迎えた喜びと感謝が、「朝」という漢字に盛り込まれている。

漢字の成り立ちに想いを寄せる。それは今を生きるエネルギーそのもの。

【所感】

宗祖の精神

大阪地区 森 秀之

歳を重ねるごとに、本当に何も知らな
いなあ、と気付くことが多々あります。
改めて物事の根拠を考えて自ら思考する
ことが大事であると実感しています。

つい先日、世界三大旅行記、「東方
見聞録」(作者・マルコポーロ)、「西
遊記」(作者・呉承恩(諸説あり))、
「入唐求法巡礼記」(作者・慈覚大師円
仁)の三つが、三大旅行記ということ
で、世界中では常識になっていることを知
りました。

「東方見聞録」と「西遊記」は教科書
で習いましたので、大体の内容等は少し
把握出来ているのですが、「入唐求法巡
礼記」については、私は見聞したことも
なかったもので、どんな内容か知りたくて、
近くの図書館で借りて読みました。(中

公文庫版深谷憲一訳で、七〇〇ページ程
ありました)

慈覚大師円仁は、伝教大師最澄の弟子
で、最後の遣唐使に加わり、博多から出
国し、赤山法華院、五台山で天台教学を
学び、唐の長安に滞在して仏法修行を修
め、經典その他の文物を多数無事に持ち
帰った、という内容等を日記に綴った書
物です。

世界の人が知っていて、何故現代の日
本人があまり知らないのかという点につ
いて、意図的にある箇所の情報を開示し
たくなかったからではないか、という説
を唱える学者がおられます。

長安滞在についての記述において、唐
の武宗皇帝が、道教の信者であり仏教を
弾圧しており、円仁は滞在中に会昌の廢

仏といわれる仏教弾圧を目の当たりにし
て、それを記録していたことが、その原
因ではないかということですが、

武宗皇帝の妃は仏教を保護してしまし
たが、度々皇帝に口出したことで殺さ
れてしまうのですが、そのことはまた、
皇帝の営みの相手の妃が亡くなったこと
で、今度は皇帝の母親を相手にしたいと
の要望になったらしいのですが、当然母
親から拒まれ、それをも気に入らないと
殺してしまったというような、鬼畜のよ
うな皇帝に取り入った部下が、傍若無人
の振る舞いで様々な功績を、自らの手柄
にしている等の内容も、原本には描かれ
ているようですが、その部分はこの本で
は端折られているということです。

これらは、戦前の日本人なら知ってい
た内容のようですが、対中政策の一環で
で、その箇所は省かれたとのことで、近
年になって、やっとその箇所についても
触れことができるようになったことから、
国会図書館に所蔵する原文では閲覧でき
るようです。

GHQが、戦前の多くの書物を焚書と
いって焼却するなど、戦後政策として、

欧米人に都合の悪い内容については、日本人に情報化されていないことが多々あります。

ところで、著者の慈覚大師については、大聖人が認められた「慈覚大師事」という御書があります。

弘安五年一月二十七日に記述された、太田入道殿への返書で、大聖人様の最晩年の御書で、その真蹟は中山法華経寺に所蔵されています。

この書状には、大聖人自身が、

「一歳より六十に及んで多くの物を見る中に、悦ばしき事は法華第一の経文なり。」（全集一〇一九頁）

と、はっきり断言しておられ、比叡山延暦寺・第三祖の慈覚大師のことを、

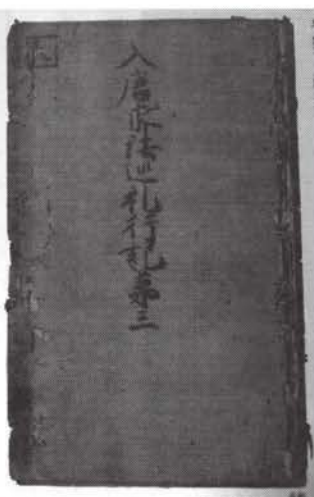
「法華経の頭こうべを切りて真言経の頂いただきとせり」（同）

と、真言密教を取り入れた慈覚大師を、手厳しく一刀両断に破折されておられます。

さらに、文末では、

「一向真言の座主にて法華経の所領を奪えるなり。しかれば此等の人人は釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵（中略）」

我が弟子等此の旨を存じて法門を案じ



円仁とその著「入唐求法巡礼行記」の写本

と記し、大聖人様が「真言亡国」を主張したことに対して、真言宗の本質を理解するよう諭されておられます。

慈覚大師は、伝教大師とともに日本最初の大師号を、清和天皇より贈られており、多くの寺院を建立して、全国各地のおよそ七〇〇ヶ寺の開基という事績があり、それらは関東方面から東北方面にかけて、目立って多く存在しているようです。

慈覚大師については、事績・功績等、世間的な評価については申し分がないようですが、宗祖大聖人は、天台法華宗を密教化した張本人であり、法華の心を蔑ろにしたとんでもない僧侶であると、法の邪正をもって断罪されており、これは同時代に生きた、生き仏とまで呼ばれた極楽寺良観に対しても同様に、法の邪正をもって断罪されているのと通じるものであり、大聖人様の仏法の本質・本物を見極める眼まなこからして見れば、当然のことであって、そこに法華経の随自意の精神、深い慈悲の心も感じられます。

私も、このような深く真理を追求する信力を、自然に養えるように精進していきたい、というのが読後の感想です。

給うべし」（全集一〇二〇頁）



仏器類もピッカピカになりました

恵日だより

大掃除・お花作り

十月三十日（日）午前九時半



一所懸命心を込めて……

御会式を一週間後に控えた十月三十日（日）、午前九時半から、御会式の準備の大掃除とお花作りが行われました。朝方は肌寒く感じましたが、この日は朝から天気もよく、次第に暖かくなつて絶好の大掃除日和となりました。例年の通り、大掃除は本堂内では、仏器磨きや仏具掃除やす払い、窓ふき等、また、本堂の外回りや庭など、普段はなかなか手の届かないところまで丁寧に行われました。

大掃除が一段落すると、婦人部によって準備されたおにぎりや味噌汁に舌鼓を打ちながら、早めの昼食をいただき、小憩の後、お昼過ぎからはお花作りが始まりました。

本堂内に並べられた机の前で、全員参加で、あらかじめ婦人部によって作られたお花と葉を竹に巻く作業が始まり、午後三時過ぎ頃には、一五〇本のお花が完成し、その後、完成したお花の御宝前への飾り付けと、本堂内の紅白幕の幕張りを終え、後片付けを終えて解散しました。また、十一月三日（木）午後一時より、有志の方々によって、御宝前の最終飾り付けと、本堂玄関、山門の幕張り等が行われました。

目 師 会

十一月十五日（火）午後一時

朝方は冷え込んだものの、好天に恵まれ、昼間は暖かい一日となったこの日、



中浦家のみなさん

第三祖日目上人のご高德をご報恩申し上げる目師会が、午後一時より奉修されました。

篤信の方々が集まった本堂では、午後一時の出仕鈴によりご住職が出仕され、法要は献膳、読経、唱題と如法に奉修され、その後、ご住職より日目上人の御消息を拝しての法話があり、参詣者一同と共に日目上人のご高德を偲びました。

七五三祝い

十一月十二日(土)

十一月十二日(土)、御宝前において

七五三祝いのお詣りがありました。読経唱題の後、住職より御本尊頂戴の儀があり、千歳飴とお菓子をいただいた後、記念撮影をして終了しました。

・池田市 中浦愛梨さん 六歳

案内のお知らせ

*新年の抱負を募集します。

毎年『恵日』新年一月号に掲載される「新年の抱負」への投稿を、役員の方だけでなく、広く講員の皆様方から募集します。なお、締め切りはお講の日(十三日)とさせていただきますので、お寺に持参されるか、メールに添付してお送り下さい。

*元朝・正月勤行会のご案内

令和五年は、例年の通り元朝勤行会を、一日午前〇時に、正月勤行会は、一日から三日の三が日、午前十時と午後二時の二回奉修いたします。

特に人数の制限はしませんが、新型コロナウイルス対策として、お出かけ前の

検温のほか、マスク着用、手指の消毒等、参詣のみなさまにご協力のほど、よろしく願います。

【訃報】

〔豊能地区〕豊中市

惠光院妙定信女 十月十九日寂

俗名前田定子之霊 行年九十六歳

〔大阪地区〕羽曳野市

真正院法行信士 十月二十四日寂

俗名竹村正博之霊 行年七十四歳

〔北摂地区〕大阪市

孝道院法行信士 十月二十五日寂

俗名木村孝義之霊 行年七十四歳

この度、右々の方がお亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈りします。

十二月の行事

一日 (木) 午後二時 お経日

四日 (日) 午前九時 講中勤行会・幹事会

七日 (水) 午後二時 広基寺御大会式

十一日 (日) 午後一時 お講・役員会

十三日 (火) 午後一時 お講



※一月号の継命・恵日発送(12月末)は、

『豊能』地区が担当です。

二月号の継命・恵日発送(1月末)は、

『兵庫』地区が担当です。

【師走詠草】

〔和風〕

なまいきな ことば投げし子 叱る後
心乱れつ シール張りする
病をし 配達せる子を 手伝へる
師走の朝 心通ひて

【恵日俳壇】

〔農婦〕

屋根裏に 飽うごめく霜夜かな
冬ざれや村に空家のまたひとつ

〔森秀之〕

山粧うあれは銀杏か楓かな
晴れてよし曇ってもよし秋の空
葛城の山頂賑わうススキかな

〔吉田裕〕

青鰻や不器用に生き五十年
涅槃西風縞なす水面昨日より
夜の厨寒の蜺のゆるびろし

恵日

令和四年十二月号 通巻三三五号
令和四年十二月一日発行

編集兼
発行人

菅野憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇〇 源立寺内

TEL (077) 751-3335

E-Mail kanno@ombat.zaq.ne.jp

購読料(含送料)年間二〇〇〇円

加入者名 恵日編集室会計

〒振替 口座番号 0138012112649

